

ここに生きていることを

李 曉
LI XIAO

私はもう日本に来て四年間余りになった。私は自分のことを外国人という枠に入れて、ここに生きてきたのは間違っているかなと考えていた。

アルバイトのため、私はよく午後四時ぐらいに出かける。住んでいる山から自転車置き場まで降りていく道で帰宅途中の小学生達と出会った。最初、列で歩いている小学生達からそれぞれ「こんにちは」と挨拶してくれた時、面白いなと思って笑って返事をした。時には、止まって私の返事を待つ子もいた。じっと私の顔を見るあの眼差しには、この世界の無邪気さが見えた。それで私も止まって、情熱をもって「こんにちは」と返した。

中国には「人之初、性本善」という古来の話があり、私はこれをずっと信じている。子供達が挨拶をするときは相手の身分を気にするわけがないだろう。ただ「一人の人」という認識をして接しているのだ。

ある日、また小学生達と会った。道路の端に十人ぐらい集まっていて、私を見かけたら、一斉に「この人を助けてください」と私に呼びかけた。近づいたら、一人の子が道路の安全柵と落下防止の綱の間に入って、出られなくなってしまったのだ。私が挟まれた子を抱き上げると、うまく隙間から脱出できた。仲間が助けられたから、一緒にいた子供達は喜んで「ありがとう」と七嘴八舌で言ってくれた。その場では何も思わなかったが、後でじっくりと考えると、これは地域の住民としての責任を果たしたのではないかと思った。これで「ここ」との繋がりができ始めた。

アルバイト先のおばさんがくれたおいしい和菓子、友からもらった好きなアニメのグッズ、子供がいるお姉さんが言った愚痴、学校の先生が楽器を練習するときの動画、クラスメイトからの誕生日プレゼント、恋人と別れた時にそばにいてくれた友、そして、中国語勉強会のボランティア、留学生発表会、大学の学園祭に参加したこと…このような小さいことだが、星の光とみなしている輝きは、ここに生きていることの証だ。「一人の人」として「ここ」に生きていることを確めてきた。

初めて日本に来た時は、まわりの人から、日本人と外国人の立場を対立させてしまう文句ばかり聞いた。でもそういう文句を言う人も、「アルバイト先の日本人が優しいから、例外だ」という。一方、「外国人はダメ、でもあなたは彼達と違う」という日本人もいる。

大人はこの世界を複雑にしすぎなのではないかとよく思う。

外国人という身分は客観的な事実だが、生きる支障にはならない。国から出て、家族と離れて、「ここ」で求めているのが「外国人」という身分だけではないなら、心を閉ざすことなく、自発的に「ここ」に生きて欲しい。

一人の人として、ここに生きていることを。